

(要約版)

## 愛煙家本居宣長の原点『おもひ草』の研究

助成研究者 田中 康二 (皇學館大学文学部・日本近世文学)

### 1. 研究目的

本居宣長は近世が生んだ最大の思想家の一人であり、中世歌学から近代国文学に橋渡しする偉大な国学者である。宣長は学者であると同時に、知る人ぞ知る愛煙家でもあった。宣長はおそらく京都留学中の二十代前半にタバコをおぼえ、精神集中のために喫煙していたと考えられる。宣長には二十四歳の時に執筆した『おもひ草』という和文随筆があり、愛煙家宣長の面目がうかがえる。この和文随筆を研究課題としたい。

『おもひ草』は宝暦三年(1753)に執筆され、宣長没後に石出大春という人物によって蔵板(私家版)として刊行されたが、自筆本と刊本との間には看過し得ない異同が存在する。そもそも、自筆本のタイトルは「尾花が本」であり、刊本では「おもひ草」となっている。本課題研究では、流布本たる刊本に依拠して、便宜上「おもひ草」と称することとする。また、段落分けにおいても、自筆本と刊本とでは異なるところが存在する。さらに、字句における異同は枚挙に暇がない。そのため、実見できる限りの諸本を収集し、校合作業を経て、標準テキストを確定する必要がある。

次に、『おもひ草』は約三十の段落から構成されるが、各章段はタバコにまつわるさまざまなエピソードを散りばめており、その内容はそこで採用される文体と密接な関係がある。たとえば、四季のうつろいや恋愛を描く章段では古典和歌を踏まえた流麗な和文が採用されるが、卑俗な話題の章段では俗語をふんだんに用いた俗文体である。このような文体面・表現面からのアプローチは先行研究にはまったくなく、基礎的ではあるが斬新な研究と言える。是非、文体面・表現面から『おもひ草』を掘り下げて、愛煙家本居宣長の実像を明らかにしてみたい。

### 2. 研究方法

和文随筆『おもひ草』について、その成立からそれが出版されるまでの経緯と、当該テキストの残存状況の調査と整理、さらには当該テキストの正確な読解と注釈作業という三本柱で研究を進める。

まず、『おもひ草』の成立と出版の経緯については、本居宣長記念館所蔵の残存断簡資料により、執筆年次および月日の推定まで行けると確信している。また、これが宣長の死後ではあるが、出版されて全国の門弟たちの知るところとなったわけであるが、それは出版に持ち込んだのは誰か、どこの書肆から出版されたのか、どの程度刷られたのか、などについて、記念館の残存資料により明らかにしたいと考える。

次に、『おもひ草』の現存テキストの残存状況の調査をおこなう。写本と版本にわたる当該書は、古典籍総合目録データベースによれば、十九本が知られている。むろんそれら以外にも所在をつかんでいる諸本は数本ある。それらの流布状況を正確に把握することにより、当該テキストの享受の様相をつかむことができる。

第三として、『おもひ草』を文学テキストとして読み解くことを実行する。当該テキストには、

きわめて多くの古典文学作品を踏まえた表現が横溢していて、表面上の文意を追っていくだけでは、テキストを読解したことにはならない。このような文章は速読すれば読み飛ばしてしまうが、精読と注釈をおこなうことによって、文学作品として扱うことが可能となる。

以上、三つの観点から『おもひ草』へのアプローチを実践する。

### 3. 考察と結論

上記の研究目および研究方法に基づいて、研究期間内に成し得た調査と、それに基づく検討を経て、次の三点の結論を得た。

- (1) 愛煙家としての本居宣長のプロフィールの調査
- (2) 『おもひ草』の成立と諸本に関する仮説
- (3) 『おもひ草』の文体的特徴の指摘

まず、(1)は、本居宣長が実生活の中でタバコに親しむ場面や、宣長がタバコに関する蘊蓄について、宣長が著した随筆や宣長が博搜した漢籍類を紹介しつつ整理した。後年になって宣長は、「漢意」排斥を旗印に儒学・漢学・漢籍を目の敵にして非難を繰り返すことになるが、二十四歳の時点においては、むしろ積極的に漢籍をむさぼり読み、和漢の知識を吸収し、これを自らの教養としていたことがわかる。

次に、(2)は、研究期間中に調査・収集した『おもひ草』の版本ならびに写本について整理し、その書誌・文献的観点から分析した。とりわけ、収穫であったのは、皇學館大学附属図書館蔵五葉蔭文庫に所蔵される『尾花が本』と、本居宣長記念館に現蔵される、岩田隆氏旧蔵本『尾花が本』とが極めて近い関係にある本であることが判明したことである。このことから、岩田隆氏旧蔵本が五葉蔭文庫本の祖本であり、岩田本は宣長自筆本に近いという仮説を導き出すことができた。また、版本の版種は一つであり、異版は存在しないという結論を得た。

最後に(3)は、(2)を踏まえて『おもひ草』の文体的特徴を析出させるべく、おもに和歌をはじめとする古典文学作品からの摂取について考察した。その結果、宣長はすでに二十四歳の時点で、多くの日本古典文学作品を読破し、これを自家薬籠中の物として豊かな文藻を発揮していたことをつきとめた。この時期は漢方医としての修行の時期であり、漢学と医学とを重点的に兼修していたとするのが通説であるが、この習作『おもひ草』を根拠として、当時において相当の日本古典文学の素養があったと言える。さらに、後年に執筆する随筆『玉勝間』等の俗文体もまた、この時期の文章修行によって獲得されたという結論を得た。